

保育の中の静かな時間



西 隆太朗

子どもたちに導かれ、共に夢中になつて遊ぶ時、ふと静かな時間が訪れることがある。

保育園はいつでも笑顔にあふれていて、普段はうれしく、時に悲しく、そして優しく、子どもたちの声が響きわたっている。片時もやむことのないさざめきの中に、それでも私とその子と二人だけの間で、静かな時間を感じことがある。

初めて保育園を訪れたころ。それまでのようになつた（次ページ写真）。

S. フロイトは、精神分析の自由な語らいを、患者担当者としてではなくて、保育を学ぶために――



▲「動きやすい服装」であってもなくても、子どもたちは遊びの世界に連れて
いってくれる

者の心の世界を共に旅することにたどれた。V. アクスラインの『遊戯療法』には、「子どもが導いてくれる (The child leads the way)」という一節がある。いま、子どもたちはたとえでなく、戸惑える新参者の手をとつて、彼らの世界への旅に導いてくれたのだった。

「おにいちゃん、こっち来て！」三歳のK君に手を引かれ、園庭中を駆け回っているうちに、私もいつの間にか無心に遊んでいた。K君は雲梯(うんたい)の所に行つて「ここにぶらさがつてほしい」と言う。私がやつて見せると、みんなは「すごい」と言って喜んでくれた。子どもたちは、「できるようになりたい」「伸びていきたい」という気持ちでいっぱいのようだつた。

それを見ていた同じ三歳のH君も、雲梯に登りたくなつた。柱に手をかけた後、私のほうを少し振り

返るようにして、はつきりと言葉にはしないけれど、私に支えてほしいらしく、どことなく切ない顔で私を見上げる。私に抱えられて雲梯によじ登ると、H君は本当にうれしくなる。うれしくて、「おサルさんみたい」と言いながら、キヤツキヤツと鳴き声を上げる。それから降りる時は、ただ降りのではなく、自分の両手を使つて自分の力で降りていきたいようなので、私も手を添えるのは軽くする。

「もう一回！」H君はどんどん登りたり、左側の柱から登れば今度は右の柱から、右から登れば次は左から、何度も何度も雲梯の上で「サルになつた！」と鳴き声を上げ続けた。サルになりきったH君をあちらこちらと押し上げながら、私はこんなにも一心に遊んでいられることをうれしく思うと同時に、この興奮がどこまで高まつていくのだろう……とも、どこかで思っていた。

その時、雲梯の上で、H君はふと私の腕時計に気



▲サルになりきって遊ぶ時間は、いつまでも続くような気がした

づいて、「これ、動いてる……」とつぶやくように言つた。そのデザインを、「かっこいい」とも言つてくれた。それから私の指輪を見て、「結婚してるの?」と尋ねた。こんな時、あまりうまい言葉も見つからなくて、「ああ」とか「うん」とか「ありがとう」とか言うしかなかつたのだが、さつきの興奮は風が吹くように通り過ぎていったようで、ただ二人の静かな時間が訪れた。園庭ではみんなが遊ぶにぎやかな声もしていたのだろうし、さつきまではどこまでも興奮が収まらないように思えていたのだが、この時は落ち着いた時間が過ごせた気がした。

この静かな時間の中で、人と人として、H君と親しくなれた氣がする。

そのうちに、保育士の先生が声をかけて、みんなが集まる時間になつた。「また遊ぼうね」とH君に言うと、H君は「ぜつたい?」と何度も振り返りながら、みんなのほうに駆けていった。

うれしいこと、楽しいこと、悲しいこと——どんな感情も、子どもたちは体いっぱいに感じ、伝えてくれる。子どもしさを失いかけた私たちには、その感情が抱えきれないこともある。高まる感情をどう受け止めればいいのか、その解決は、あらかじめわかっているわけではない。なだめてみたり、収めようとしてみたり、制止してみたりしても、自然が生み出す感情を抑えつけることはできない。そうではなくて、自然の感情を二人で一心に体験する中から、何か思いがけないもの、新しいものが生まれる気がする。心を支え、関係を深める力は、子どもたち自身がもつてゐる気がする。

保育園では、いつも何かが新しく生まれている。まだ何かはわからないけれど、その新しい未来に出合いたくて、また保育園を訪れている。

(ノートルダム清心女子大学児童学科准教授)